



暮らしの風景

石へのまなざし 庵治石の石切り場

〔香川県高松市牟礼町〕

私たちの暮らしを支える材料、
石はどこから来るのだろう。
荒々しい石切り場の
風景が語りかけるのは、
現在の私たちの暮らしと
大地のあり方である。

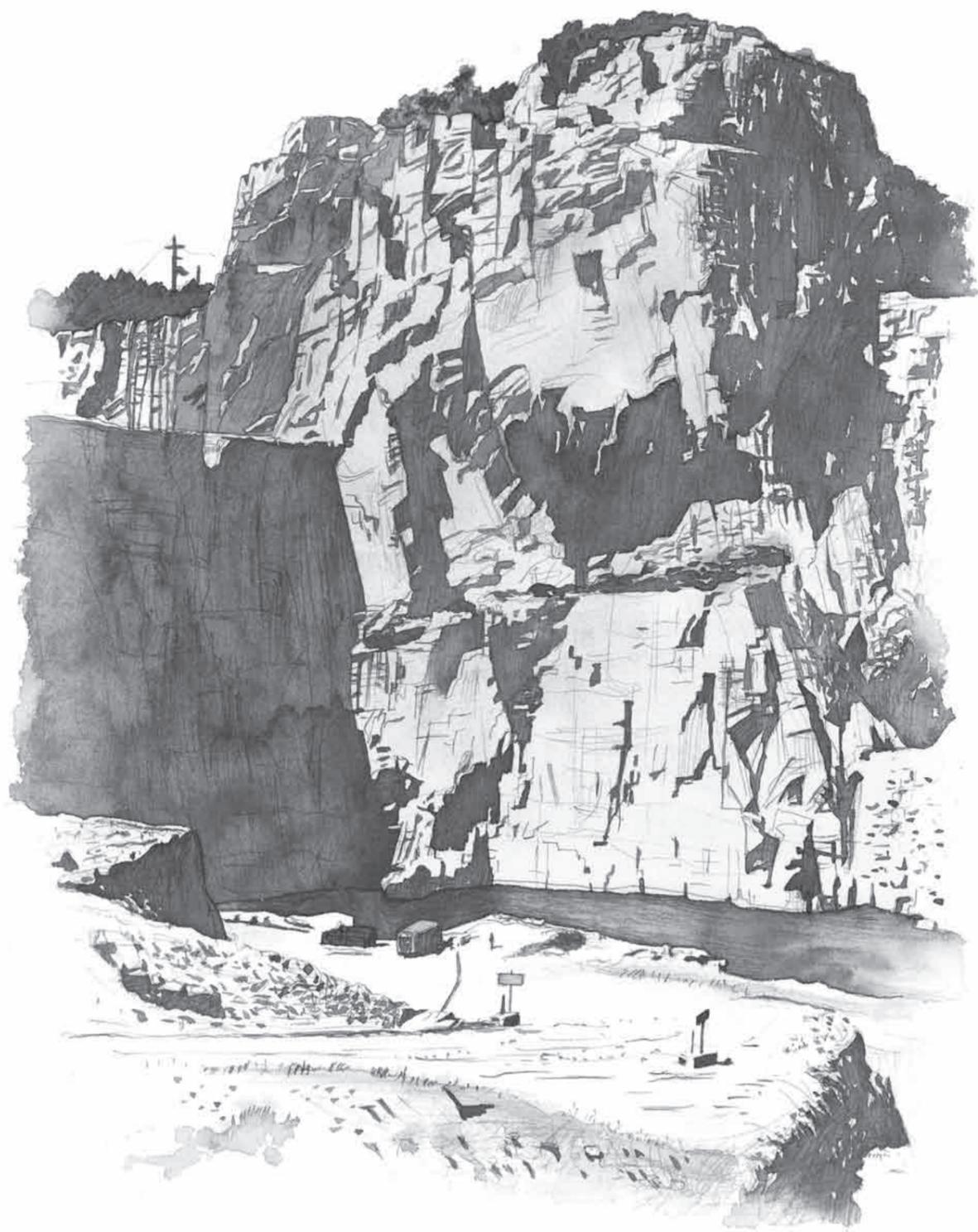
文——佐々木葉 Yoh Saasaki
絵——佐々木悟郎 Goro Saasaki



毎日毎日、最もたくさんの人びとに踏まれて
いるのは、駅の階段だと思ふ。私もほぼ毎日、
あちこちの駅の階段を上り下りする。それらは、
意外と石であることが多い。あ、石だ、と気づ
くと同時に、この石はどこから来たのだろう、
とも思ふ。新しいものは中国からかな。名
古屋駅のそれは無垢で相当に年季が入っている
から、国内のどこかだろう。転ばぬようにと足
元を見る以上に、私はいつも駅の踏まれて踏ま
れてあり続ける階段の石に思いを寄せる。

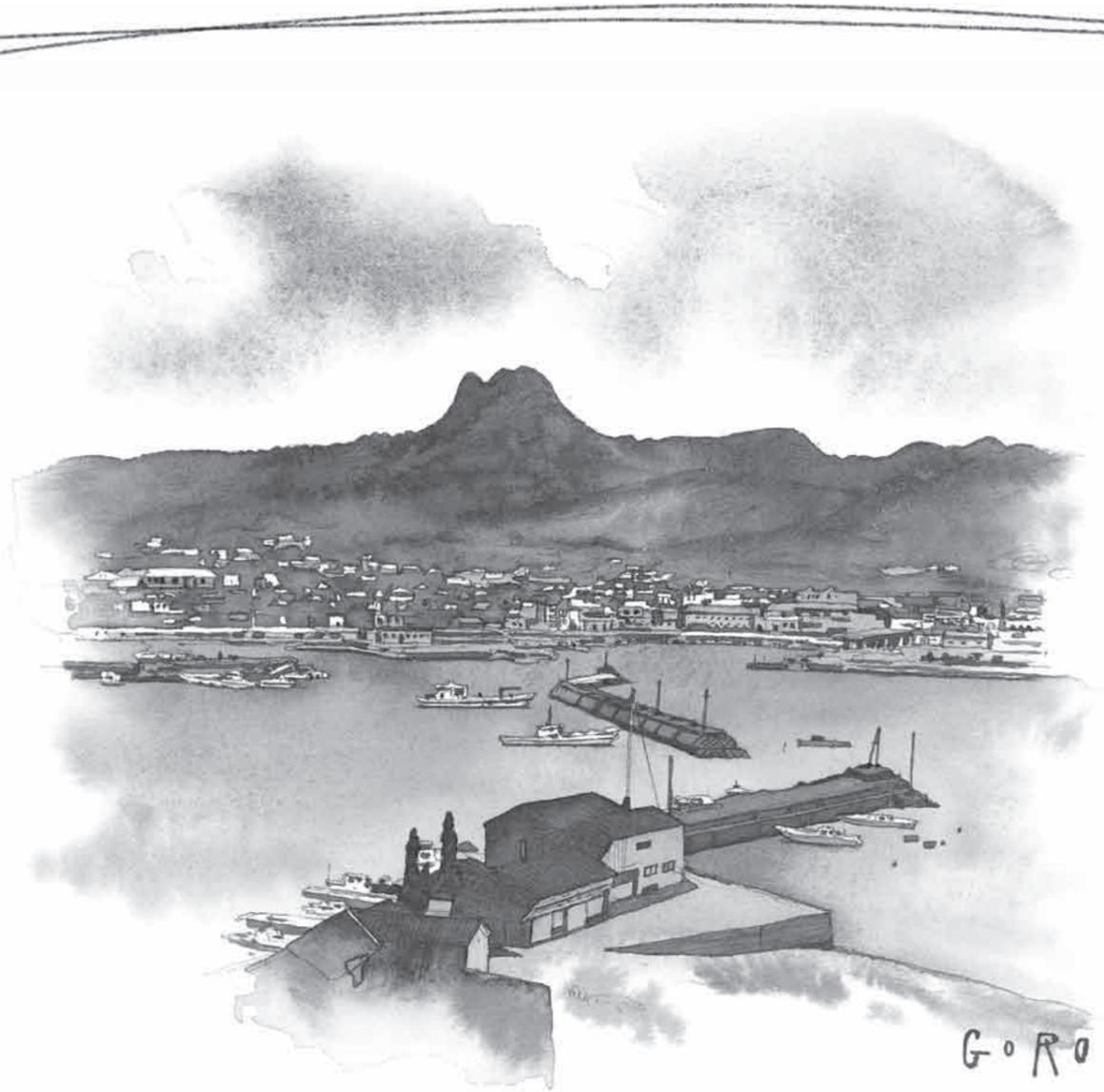
庵治石の産地と石材の価値

高松市の牟礼に、イサム・ノグチ庭園美術館
を訪れる機会を得た。八月の猛暑の日であった。
同時に香川大学の西成典久さんのご案内で、庵
治石の産地を巡った。西成さんはそこで「ま
ちづくりに縁がある。ちょうど「石あかりロード」
という催しが行われていた。地元の庵治石を職
人さんたちが灯籠、灯具、飾り物、オブジェ、と
様々に呼べそうな形に加工して灯りをともし、
夏の二カ月間通りに展示するのだ。すでに五回
を重ね、平成二十一年度には国土交通省の手づ
くり故郷賞も受賞した。展示作品は販売もされ、
石に特段興味なかった人びとが、これいい



高松市牟礼町、五剣山の麓にある庵治石の石切り場。
峨峨たる石切り場の様は、人と自然の力の拮抗の場である。
立派な文化的景観だ。

暮らしの 風景



かつて庵治石の積み出しで賑わった庵治港。堤防の石はもちろん庵治石だ。生業の連関が築いた地域の風景も変わりつつある。見えている頂は五剣山。

じゃない、と買い求めていたりするという。改めて思えば、石は、現代の個人の生活からは遠い存在である。唯一墓石を除いて。庵治石は、その墓石としては第一級、いや超一級とされる。花崗岩できわめて目が細かく、特に水をかけた時の艶と色合い、ふわっと浮きあがってくるモアレ模様のような表情は、乾いた時との対比も含めてきわめて印象深い。細かい細工にも適した耐久性のある素材は、まさに墓石にうってつけである。江戸期から全国的に流通した。高級石材として評価されると共に、わずかな傷も許さないマニアックな品質管理がされる。その結果、最終的に高級商品となるのはわずか一割。残りは極端に価値が下がってしまう。精緻な加工を行う工場の隣のヤードには、その他の材が無造作に山積みされていた。

石切り場を案内していただいた。その荒々しい表情とスケールの大きさに圧倒される。真夏の日を照り返し、文字通り目も眩む。緑と水を含んだやさしい日本の山とは対極にある表情。しかし、切りっぱなしの断面はある絶妙なバランスの形でもあるためか、落ち着いて眺めれば破壊の爪痕などではなく、人と自然の共同作品として見えてくる。文化的景観である。木と土と共に最も早くから人の暮らしを支える材料であった石。場所ごとに異なる風土と人とが築き

あげてきた石切り場の風景。その地に息づく職人の技と知恵。しかしすべての文化的景観がそうであるように、ここでもその存続は危うい。石を切りだす仕事は過酷だ。その担い手を国内で探すことは難しくなっている。暮らしを支えていたあたり前の素材としての石材の価値は低下した。コンクリートや各種ブロックなどの工業製品に押され、自然素材の魅力から石が求められる際も価格が安い輸入材に勝てない。かくして地域に根付いた材と技は追い詰められていく。石あかりロードの取り組みは、石をもういちど身近な存在として人びとの暮らしに滑り込ませ、石へのまなざしをリフレッシュさせようとするものでもある。

風景を支える大地の命として

墓石や庭石、彫刻、さらには床の間を飾る観賞用の石には、美術品、工芸品としての価値がある。一方で護岸や舗装、基礎や建造物に用いられる石には、実用品としての価値がある。量として圧倒的に多く、また風景を支えるのは後者の石たちだ。インフラやパブリックスペースのデザインにおいても、工業製品ではなく自然石をというニーズは高い。しかし常に価格と手間の壁が立ちはだかり、使えなかったり、薄っぺらな化粧材になったり、加工も産地も見知ら

ぬ国に依存したりする。これは食料自給率四割のこの国の食料が抱える問題に通じる。しかし食料についてはその直接的な安全性への関心から、産地の明記、地産地消の取り組み、フードマイレージによる環境評価などが既に動き始めている。スローフードという価値観も浸透してきた。

石も同じでしょう、と思う。食料はその地の土と水でできている。それ以上に石は大地そのものだ。以前、秋田は男鹿半島の石切り場を訪ね、大きな石を割る作業を見せていただいた。楔から伝えられた確な力が静かに石を開き、何万年かの時を経て初めて空気に触れる面が現れたとき、私は思わずそっと手のひらを当てた。しっとりとなめれていた。石は息をしている。石は生きている。その実感が忘れられない。

石は重く、硬く、性がある。自然の摂理のもとで存在していた石を強引にそこから引き剥がし、手なづけ、励まし、人の摂理のもとでの新たな存在へと転換させる仕事。石を扱う職人の手わざは、まさに大地の命をいただく仕事である。そうして生まれた第二、第三の大地を、私たちは無造作に踏みながら日々生きている。水や食べ物に対するのと同じ関心を石にも向け、風景を足元で支える動きにつなげていきたい。

ささき・よう ●一九六一年、鎌倉生まれ。早稲田大学建築学科卒業。東京工業大学大学院修了。早稲田大学創造理工学部社会環境工学科教授。研究室およびブログはyohlabで検索。